

土神と狐

宮沢賢治

青空文庫

(一)

一本木の野原の、北のはづれに、少し高く盛りあがった所がありました。いのころぐさがいっぱいに生え、そのまん中には一本の奇麗な女の樺かはの木がありました。

それはそんなに大きくはありませんでしたが幹はてかてか黒く光り、枝は美しく伸びて、五月には白き雲をつけ、秋は黄金きんや紅やいろいろの葉を降らせました。

ですから渡り鳥のくわくこうや百舌もずも、又小さなみそさゞいや目白もみんなこの木に停とまりました。たゞもしも若い鷹たかなどが来てゐるときは小さな鳥は遠くからそれを見付けて決して近くへ寄りませんでした。

この木に二人の友達がありました。一人は丁度、五百歩ばかり離れたぐちやぐちやの谷や地ちの中に住んでゐる土神で一人はいつも野原の南の方からやって来る茶ちやいろの狐きつねだったのです。

樺の木はどちらかと云いへば狐の方が好きでした。なぜなら土神の方は神といふ名こそついでにはまりましたがごく乱暴で髪もぼろぼろの木綿糸の束のやう眼めも赤くきものだつてまる

でわかめに似、いつもはだしで爪も黒く長いのでした。ところが狐の方は大へんに上品な風で滅多に人を怒らせたり気にさはるやうなことをしなかつたのです。

たゞもしよくよくこの二人をくらべて見たら土神の方は正直で狐は少し不正直だったかも知れません。

(二)

夏のはじめのある晩でした。樺には新らしい柔らかな葉がいっぱいについていゝかをりがそこら中いっぱい、空にはもう天の川がしらしらと渡り星はいちめんふるへたりゆれたり灯つたり消えたりしてゐました。

その下を狐が詩集をもつて遊びに行つたのでした。仕立おろしの紺の背広を着、赤革の靴もキツキツと鳴つたのです。

「実にしづかな晩ですねえ。」

「えゝ。」樺の木はそつと返事をしました。

「蝸ほしが向ふを這つてゐますね。あの赤い大きなやつを昔は支那では火と云つたんです

よ。」

「火星とはちがふんでせうか。」

「火星とはちがひますよ。火星は惑星ですね、ところがあいつは立派な恒星なんです。」

「惑星、恒星つてどういふんですの。」

「惑星といふのはですね、自分で光らないやつです。つまりほかから光を受けてやつと光るやうに見えるんです。恒星の方は自分で光るやつなんです。お日さまなんかは勿論もちろん恒星ですね。あんなに大きくてまぶしいんですがもし途方もない遠くから見たらやつぱり小さな星に見えるんでせうね。」

「まあ、お日さまも星のうちだったんですわね。さうして見ると空にはずるぶん沢山のお日さまが、あら、お星さまが、あらやつぱり変だわ、お日さまがあるんですね。」

狐きつねは鷹おうやう揚きつねに笑ひました。

「まあさうです。」

「お星さまにはどうしてあゝ赤いのや黄のや緑のやあるんでせうね。」

狐は又鷹揚に笑つて腕を高く組みました。詩集はぶらぶらしましたがなかなかそれで落ちませんでした。

「星に橙だいだいや青あおやいろいろある訳ですか。それは斯かうです。全体星といふものははじめはぼんやりした雲のやうなもんだつたんです。いまの空にも沢山あります。たとへばアンドロメダにもオリオンにも獵犬座にもみんなあります。獵犬座のは渦巻リシクきです。それから環リング状星雲ネビュラといふのもあります。魚の口の形ですから魚フィッシュ口マウス星雲ネビュラとも云ひますね。そんなのが今の空にも沢山あるんです。」

「まあ、あたしいつか見たいわ。魚の口の形の星だなんてまあどんなに立派でせう。」
「それは立派ですよ。僕水沢の天文台で見ましたがね。」

「まあ、あたしも見たいわ。」

「見せてあげませう。僕は望遠鏡を独乙ドイツのツアイスに注文してあるんです。来年の春までには来ますから来たらすぐ見せてあげませう。」狐は思はず斯うそう云つてしまひました。そしてすぐ考へたのです。あゝ僕はたった一人のお友達にまたつい偽うそを云つてしまった。あゝ僕はほんたうにだめなやつだ。けれども決して悪い気で云つたんぢやない。よろこばせやうと思つて云つたんだ。あとですっかり本当のことを云つてしまはう、狐はしばらくしんとしながら斯かう考へてゐたのでした。樺かばの木はそんなことも知らないでよろこんで言ひました。

「まあうれしい。あなた本当にいつでも親切だわ。」

狐は少し悄気しよげながら答へました。

「え、そして僕はあなたの為ためならばほかのどんなことでもやりますよ。この詩集、ごらんさいませんか。ハイネといふ人ですよ。翻訳ですけれども仲々よくできてるんです。」

「まあ、お借りしていゝんでせうかしら。」

「構ひませんとも。どうかゆつくりごらんすつて。ぢや僕もう失礼します。はてな、何か云ひ残したことがあるやうだ。」

「お星さまのいろいろのことですわ。」

「あゝさうさう、だけどそれは今度にしませう。僕あんまり永くお邪魔しちやいけないから。」

「あら、いゝんですよ。」

「僕又来ますから、ぢやさよなら。本はあげてきます。ぢや、さよなら。」狐はいそがしく帰って行きました。そして樺かばの木はその時吹いて来た南風にざわざわ葉を鳴らしながら狐きつねの置いて行つた詩集をとりあげて天の川やそらいちめんの星から来る微かすかなあかりにす

かして頁ページを繰りました。そのハイネの詩集にはロウレイやさまざま美しい歌がいっぱいにあったのです。そして樺の木は一晩中よみ続けました。たゞその野原の三時すぎ東から金牛宮きんぎゅうきゅうののぼるころ少しとろとろしただけでした。

夜があげました。太陽がのぼりました。

草には露がきらめき花はみな力いっぱい咲きました。

その東北の方から熔とけた銅の汁をからだ中に被かぶつたやうに朝日をいっぱい浴びて土神がゆつくりゆつくりやつて来ました。いかにも分別ぶんべつくささうに腕うでを拱こまねきながらゆつくりゆつくりやつて来たのでした。

樺の木は何だか少し困ったやうに思ひながらそれでも青い葉をきらきらと動かして土神の来る方を向きました。その影は草に落ちてちらちらちらちらゆれました。土神はしづかにやつて来て樺の木の前に立ちました。

「樺の木さん。お早う。」

「お早うございます。」

「わしはね、どうも考へて見るとわからんことが沢山ある、なかなかわからんことが多いもんだね。」

「まあ、どんなことでございますの。」

「たとへばだね、草といふものは黒い土から出るのだがなぜかう青いもんだらう。黄や白の花さへ咲くんだ。どうもわからんねえ。」

「それは草の種子が青や白をもつてゐるためではないでございませうか。」

「さうだ。まあさう云へばさうだがそれでもやつぱりわからんな。たとへば秋のきのこのやうなものは種子もなし全く土の中からばかり出て行くもんだ、それにもやつぱり赤や黄いろやいろいろある、わからんねえ。」

「狐さんにでも聞いて見ましたらいかがでございませう。」

樺の木はうつとり昨夜ゆふべの星のはなしをおもつてゐましたのでつい斯かう云つてしまひました。

この語ことばを聞いて土神にはは俄にはかに顔いろを変へました。そしてこぶしを握りました。

「何だ。狐？ 狐が何を云ひ居をつた。」

樺の木はおろおろ声になりました。

「何も仰おつしやつたんでございせんがちよつとしたらご存知かと思ひましたので。」

「狐なんぞに神が物を教はるとは一体何たることだ。えい。」

樺の木はもうすっかり恐こはくなつてぷりぷりぷりゆれました。土神は齒をきしきし嚙かみながら高く腕を組んでそこらにあるきまはりました。その影はまつ黒に草に落ち草も恐ふるれて顛ふへたのです。

「狐きつねごとの如きは実に世の害悪だ。たゞ一言もまことはなく卑怯ひげふで臆おくびやう病びやうでそれに非常ねたに妬ねたみ深いのだ。うぬ、畜生の分際として。」

樺かばの木はやつと氣をとり直して云ひました。

「もうあなたの方のお祭も近づきましたね。」

土神は少し顔色を和げました。

「さうぢや。今日は五月三日、あと六日だ。」

土神はしばらく考へてゐましたが俄にはかに又声を暴あららげました。

「しかしながら人間どもは不届ちかごろだ。近頃ちかごろはわしの祭にも供物一つ持つて来ん、おのれ、今度わしの領分に最初に足を入れたものはきつと泥の底に引き擦り込んでやらう。」土神はまたきりきり齒はが噛がみしました。

樺の木は折角なためようと思つて云つたことが又もや却かへつてこんなことになつたのでもうどうしたらいゝかわからなくなりました。ちらちらとその葉を風にゆすつてゐました。土神

は日光を受けてまるで燃えるやうになりながら高く腕を組みキリキリ齒嚙みをしてその辺をうろうろしてゐましたが考へれば考へるほど何もかもしやくにさはって来るらしいのでした。そしてたうとうこらへ切れなくなつて、吠^ほえるやうになつて荒々しく自分の谷地^{やち}に歸つて行つたのでした。

(三)

土神の棲^すんでゐる所は小さな競馬場ぐらゐある、冷たい湿地で苔^{こけ}やからくさやみじかい蘆^{あし}などが生えてゐましたが又所々にはあざみやせいの低いひどくねぢれた楊^{やなぎ}などもありました。

水がじめじめしてその表面にはあちこち赤い鉄の渋^{しぶ}が湧^わきあがり見るからどろどろで氣味も悪いのでした。

そのまん中の小さな島のやうになつた所に丸太^{こしら}で拵^{こしら}へた高さ一間ばかりの土神の祠^{ほくら}があったのです。

土神はその島に歸つて来て祠の横に長々と寝そべりました。そして黒い瘡^やせた脚をがり

がり搔かきました。土神は一羽の鳥が自分の頭の上をまつすぐに翔かけて行くのを見ました。すぐ土神は起き直つて「しっ」と叫びました。鳥はびっくりしてよろよろと落ちさうになりそれからまるではねも何もしびれたやうにだんだん低く落ちながら向ふへ遁にげて行きました。

土神は少し笑つて起きあがりました。けれども又すぐ向ふの樺の木の立つてゐる高みの方を見るとはつと顔色を変へて棒立ちになりました。それからいかにもむしゃくしゃするといふ風にそのぼろぼろの髪毛を両手で搔きむしつてゐました。

その時谷地の南の方から一人の木樵きせりがやつて来ました。三つ森山の方へ稼かせぎに出るらしく谷地のふちに沿つた細い路みちを大股おほまたに行くのでしたがやつぱり土神のことは知つてゐたと見えて時々気づかはしさうに土神の祠ほこらの方を見てゐました。けれども木樵きせりには土神の形は見えなかつたのです。

土神はそれを見るとよろこんでぱつと顔を熱ほてらせました。それから右手をそつちへ突き出して左手でその右手の手首をつかみこつちへ引き寄せるやうにしました。すると奇体なことは木樵はみちを歩いてゐると思ひながらだんだん谷地やちの中に踏み込んで来るやうでした。それからびっくりしたやうに足が早くなり顔も青ざめて口をあいて息をしました。土

神は右手のこぶしをゆつくりぐるつとまはしました。すると木樵はだんだんぐるつと円くまはつて歩いてゐましたがいよいよひどく周章あわでだしてまるではあはあはあはあしながら何べんも同じ所をまはり出しました。何でも早く谷地から遁にげて出ようとするらしいのですがあせつてもあせつても同じ処ところを廻つてゐるばかりなのです。たうとう木樵はおろおろ泣き出しました。そして両手をあげて走り出したのです。土神はいかにも嬉うれしさうにやにやにやにや笑つて寝そべつたまゝそれを見てゐましたが間もなく木樵がすっかり逆上のぼせて疲れてばたつと水の中に倒れてしまひますと、ゆつくりと立ちあがりました。そしてぐちやぐちや大股にそつちへ歩いて行つて倒れてゐる木樵のからだを向ふの草はらの方へぽんと投げ出しました。木樵は草の中にどしりと落ちてううんと云ひながら少し動いたやうでしたがまだ気がつきませんでした。

土神は大声に笑ひました。その声はあやしい波になつて空の方へ行きました。空へ行つた声はまもなくそつちからはねかへつてガサリと樺かばの木の処にも落ちて行きました。樺の木ははつと顔いろを変へて日光に青くすきとほりせはしくせはしくふるへました。

土神はたまらなさうに両手で髪を搔かきむしりながらひとりで考へました。おれのこんな

に面白くないといふのは第一は狐きつねのためだ。狐のためよりは樺の木のためだ。狐と樺の木とのためだ。けれども樺の木の方はおれは怒ってはゐないのだ。樺の木を怒らないためにおれはこんなにつらいのだ。樺の木さへどうでもよければ狐などはなほさらどうでもいゝのだ。おれはいやしいけれどもとにかく神の分際だ。それに狐のことなどを気かけなければならぬといふのは情ない。それでも気にかゝるから仕方ない。樺の木のことなどは忘れてしまへ。ところがどうしても忘れられない。今朝は青ざめて顫ふるへたぞ。あの立派だったこと、どうしても忘れられない。おれはむしゃくしゃまぎれにあんなあはれな人間などをいぢめたのだ。けれども仕方ない。誰たれだつてむしゃくしゃしたときは何をするかわからないのだ。

土神はひとりで切ながつてばたばたしました。空を又一びきの鷹たかが翔かけて行きましたが土神はこんどは何とも云はずだまつてそれを見ました。

ずうつとずうつと遠くで騎兵の演習らしいパチパチパチ塩のはぜるやうな鉄砲の音が聞えました。それから青びかりがどくどくと野原に流れて来ました。それを呑のんだためかさつきの草の中に投げ出された木樵はやつと気がついておづおづと起きあがりしきりにあたりを見廻しました。

それから俄かに立つて一目散に遁げ出しました。三つ森山の方へまるで一目散に遁げました。

土神はそれを見て又大きな声で笑ひました。その声は又青ぞらの方まで行き途中から、バサリと樺かばの木の方へ落ちました。

樺の木は又はつと葉の色をかへ見えない位こまかくふるひました。

土神は自分のほころのまはりをうろうろ何べんも歩きまはつてからやつと気がしづまったと見えてすつと形を消し融とけるやうにほころの中へ入って行きました。

(四)

八月のある霧のふかい晩でした。土神は何とも云へずさびしくてそれにむしゃくしゃして仕方ないのでふらつと自分の祠ほくらを出ました。足はいつの間にかあの樺の木の方へ向つてゐたのです。本当に土神は樺の木のことを考へるとなぜか胸がどきつとするのです。そして大へんに切なかつたのです。このごろは大へんに心持が變つてよくなつてゐたのです。ですからなるべく狐きつねのことなど樺の木のことなど考へたくないと思つたのでしたがどうし

でもそれがおもへて仕方ありませんでした。おれはいやしくも神ぢやないか、一本の樺の木がおれに何のあたひがあると毎日毎日土神は繰り返して自分で自分に教へました。それでもどうしてもかなしくて仕方なかつたのです。殊にちよつとでもあの狐のことを思ひ出したらまるでからだが灼けるくらゐ辛かつたのです。

土神はいろいろ深く考へ込みながらだんだん樺の木の近くに参りました。そのうちたうとうはつきり自分が樺の木のとこへ行かうとしてゐるのだといふことに気が付きました。すると俄かに心持がをどるやうになりました。ずゑぶんしばらく行かなかつたのだからこゝによつたら樺の木は自分を待つてゐるのかも知れない、どうもさうらしい、さうだとすれば大へんに気の毒だといふやうな考が強く土神に起つて来ました。土神は草をどしどし踏み胸を踊らせながら大股おほまたにあるいて行きました。ところがその強い足なみもいつかよろよろしてしまひ土神はまるで頭から青い色のかなしみを浴びてつつ立たなければなりませんでした。それは狐が来てゐたのです。もうすつかり夜でしたが、ぼんやり月のあかりによじに灑んだ霧の向ふから狐の声が聞えて来るのでした。

「えゝ、もちろんさうなんです。器械的にシインメトリ対称の法則にばかり叶かなつてゐるからつてそれで美しいといふわけにはいかないんです。それは死んだ美です。」

「全くさうですわ。」しづかな樺の木の声がありました。

「ほんたうの美はそんな固定した化石した模型のやうなもんぢやないんです。対称の法則に叶ふつて云つたつて実は対称の精神を有つてあるといふぐらゐのことが望ましいのです。」

「ほんたうにさうだと思ひますわ。」樺の木のやさしい声が又しました。土神は今度はまるでべらべらした桃いろの火でからだ中燃されてあるやうにおもひました。息がせかせかしてほんたうにたまらなくなりました。なにがそんなにおまへを切なくするのか、高が樺の木と狐との野原の中でのみじかい会話ではないか、そんなものに心を乱されてそれもお前は神と云へるか、土神は自分で自分を責めました。狐が又云ひました。

「ですから、どの美学の本にもこれくらゐのことは論じてあるんです。」

「美学の方の本沢山おもちですの。」樺の木はたづねました。

「えゝ、よけいもありますませんがまあ日本語と英語と独乙語のなら大抵ありますね。伊大利のは新しいんですがまだ来ないんです。」

「あなたのお書齋、まあどんなに立派でせうね。」

「いゝえ、まるでちらばつてますよ、それに研究室兼用ですからね、あつちの隅には顕微

鏡こつちにはロンドンタイムス、大理石のシイザアがころがったりまるつきりごつたごたです。」

「まあ、立派だわねえ、ほんたうに立派だわ。」

ふんと狐の謙遜けんそんのやうな自慢のやうな息の音がしてしばらくしいんとなりました。

土神はもう居ても立っても居られませんでした。狐の言つてゐるのを聞くと全く狐の方が自分よりはえらいのでした。いやしくも神ではないかと今まで自分で自分に教へてゐたのが今度はできなくなつたのです。あゝつらいつらい、もう飛び出して行つて狐を一裂きに裂いてやらうか、けれどもそんなことは夢にもおれの考へるべきことぢやない、けれどもそのおれといふものは何だ結局狐にも劣つたもんぢやないか、一体おれはどうすればいいのだ、土神は胸をかきむしるやうにしてもだえました。

「いつかの望遠鏡まだ来ないんですの。」樺の木がまた言ひました。

「えゝ、いつかの望遠鏡ですか。まだ来ないんです。なかなか来ないです。欧州航路は大分混乱してますからね。来たらすぐ持つて来てお目にかけますよ。土星の環わなんかそれぞれ美しいんですからね。」

土神は俄にはかに両手で耳を押へて一目散に北の方へ走りしました。だまってゐたら自分が何を

するかわからないのが恐ろしくなったのです。

まるで一目散に走って行きました。息がつゝかなくなつてばったり倒れたところは三つ森山の麓ふもとでした。

土神は頭の毛をかきむしりながら草をころげまはりました。それから大声で泣きました。その声は時でもない雷のやうに空へ行つて野原中へ聞えたのです。土神は泣いて泣いて疲れてあけ方ぼんやり自分の祠ほこらに戻りました。

(五)

そのうちたうとう秋になりました。樺の木はまだまっ青でしたがその辺のいのころぐきはもうすっかり黄金きんいろの穂を出して風に光りところどころすゞらんの実も赤く熟しました。

あるすきとほるやうに黄金きんいろの秋の日土神は大へん上機嫌じやうきげんでした。今年の夏からのいろいろなつらい思ひが何だかぼうつとみんな立派なもやのやうなものに変わって頭の上わに環わになつてかかったやうに思ひました。そしてもうあの不思議に意地の悪い性質もどこか

へ行つてしまつて樺の木なども狐と話したいなら話すがいゝ、両方ともうれしくてはなすのならほんたうにいゝことなんだ、今日はそのことを樺の木に云つてやらうと思ひながら土神は心も軽く樺の木の方へ歩いて行きました。

樺の木は遠くからそれを見てゐました。

そしてやつぱり心配さうにぶるぶるふるへて待ちました。

土神は進んで行つて気軽に挨拶しました。

「樺の木さん。お早う。実にいゝ天気だな。」

「お早うございます。いゝお天気でございます。」

「天道といふものはありがたいもんだ。春は赤く夏は白く秋は黄いろく、秋が黄いろくなるぶたうと葡萄は紫になる。実にありがたいもんだ。」

「全くでございます。」

「わしはな、今日は大へんに気ぶんがいゝんだ。今年の夏から実にいろいろつらい目にあつたのだがやつと今朝からはかに心持ちが軽くなつた。」

樺の木は返事しようとしたがなぜかそれが非常に重苦しいことのやうに思はれて返事しかねました。

「わしはいまなら誰のためにも命をやる。みみずが死ななけあならんならそれにもわしはかはってやっていゝのだ。」土神は遠くの青いそらを見て云ひました。その眼も黒く立派でした。

樺の木は又何とか返事しようとしたがやつぱり何か大へん重苦しくてわづか吐息をつくばかりでした。

そのときです。狐がやって来たのです。

狐は土神の居るのを見るとはつと顔いろを変へました。けれども戻るわけにも行かず少しふるへながら樺の木の前に進んで来ました。

「樺の木さん、お早う、そちらに居られるのは土神ですね。」狐は赤革の靴をはき茶いろのレーンコートを着てまだ夏帽子をかぶりながら斯う云ひました。

「わしは土神だ。いゝ天気だ。な。」土神はほんたうに明るい心持で斯う言ひました。狐は嫉ましさに顔を青くしながら樺の木に言ひました。

「お客さまのお出での所にあがつて失礼いたしました。これはこの間お約束した本です。それから望遠鏡はいつかはれた晩にお目にかけます。さよなら。」

「まあ、ありがとうございました。」と樺の木が言つてゐるうちに狐はもう土神に挨拶もし

ないでさつさと戻りはじめました。樺の木はさつと青くなつてまた小さくぷりぷり顫ふるひました。

土神はしばらくの間たゞぼんやりと狐を見送きつねつて立つてゐましたがふと狐の赤革の靴くつのキラツと草に光るのにびつくりして我に返つたと思ひましたら俄にはかに頭がぐらつとしました。狐がいかにも意地をはつたやうに肩をいからせてぐんぐん向ふへ歩いてゐるのです。土神はむらむらつと怒りました。顔も物もの凄すごくまつ黒に變つたのです。美学の本だの望遠鏡だのと、畜生、さあ、どうするか見ろ、といきなり狐のあとを追ひかけました。樺かばの木はあわてて枝が一ぺんにがたがたふるへ、狐もそのけはひにどうかしたのかと思つて何気なくうしろを見ましたら土神がまるで黒くなつて嵐あらしのやうに追つて来るのでした。さあ狐はさつと顔いろを變へ口もまがり風のやうに走つて遁にげ出しました。

土神はまるでそこら中の草がまつ白な火になつて燃えてゐるやうに思ひました。青く光つてゐたそらさへ俄かにガランとまつ暗な穴になつてその底では赤い焰ほのほがどうどう音を立てて燃えると思つたのです。

二人はごうごう鳴つて汽車のやうに走りました。

「もうおしまひだ、もうおしまひだ、望遠鏡、望遠鏡、望遠鏡」と狐は一心に頭の隅すみのと

こで考へながら夢のやうに走つてゐました。

向ふに小さな赤剥あかはげの丘がありました。狐はその下の円い穴にはひらうとしてくるつと一つまはりました。それから首を低くしていきなり中へ飛び込まうとして後あしをちらつとあげたときもう土神はうしろからぱつと飛びかかつてゐました。と思ふと狐はもう土神にからだをねぢられて口を尖とがらして少し笑つたやうになつたまゝぐんにやりと土神の手の上に首を垂れてゐたのです。

土神はいきなり狐を地べたに投げつけてぐちやぐちや四五へん踏みつけました。

それからいきなり狐の穴の中にとび込んで行きましました。中はがらんとして暗くたゞ赤土が奇麗に堅められてゐるばかりでした。土神は大きく口をまげてあけながら少し変な氣がして外へ出て来ました。

それからぐつたり横になつてゐる狐の屍骸しかいのレーンコートのかくしの中に手を入れて見ました。そのかくしの中には茶いろなかもがやの穂が二本はひつて居ました。土神はさつきからあいてゐた口をそのまゝまるで途方もない声で泣き出しました。

その泪なみだは雨のやうに狐に降り狐はいよいよ首をぐんにやりとしてうすら笑つたやうになつて死んで居たのです。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十卷」筑摩書房

1979（昭和54）年9月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年4月20日初版第5刷発行

入力：林 幸雄

校正：今井忠夫

2003年1月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

土神と狐

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>